

Harding, Brian. 'Metaphysical Speculation and its Applicability to a Mode of Living: The Case of Boethius' *De Consolatione Philosophiae.*' *Bochumer Philosophisches Jahrbuch für Antike und Mittelalter* 9 (2004): 81-92.

上村直樹

ボエティウス『哲学の慰め』における形而上学的な思索が、思索する者（ボエティウス）に対して、哲学的なというよりも、むしろ形而上学的な「生き方」を涵養するはたらきを有することを明らかにする。Brian Harding は、こうした分析においてすでに周知の、Pierre Hadot や Alain de Libera の所見、つまり、西方ラテン世界へのキリスト教の浸透によって、古代世界における魂の救済への形而上学による実践的な関与が、修道制の確立のもとで代替されてゆくという理解を念頭におきつつ、一方では、J. A. Aertsen や C. Steel の所見、つまり、中世後期における生への配慮の源泉としてボエティウスが着目されるべきであるという主張を踏まえている。そして、哲学の女神がボエティウスを形而上学的な論証へと没頭させることで、いわば「治療」によって彼を絶望のふちから救いだし、真の自己自身へと還帰させるというプロセスを検証しようと試みる。綿密な論証への取り組みがボエティウスの精神におよぼす影響に着目するとともに、そうした形而上学研究の到達点が、神性の観想であることを示している。さらに、古代から中世への結節点にボエティウスが位置するならば、古代後期からの生への配慮の継承を証示するために、アウグスティヌス、カッシオドルス、イシドルスらのそうした配慮への取り組みの検討という今後の課題を提出している。